受験番号					
氏名					

二〇一八年度 教育学部 帰国生入試 問題用紙

国語国文学科

「小 論 文」

課題　次の文章は、長谷川櫂『俳句的生活』の一節である。後の問いに答えなさい。

さざ波や志賀の都は荒れにしをむかしながらの山ざくらかな　　読人知らず

薩摩守平忠度は忠盛の息子にして清盛の異母弟である。ただ外伝のとおり清盛の実の父が白河法皇であるとすれば異母弟ですらないということになるが、それはさておき、清盛の弟とはいっても二十六も年下で親子ほど年が離れているうえに、清盛の長男重盛や次男基盛よりも七つも六つも年が若い。平家一門のうちにあって重盛ら清盛の子どもの世代には叔父というよりは従兄弟、もしくは兄弟同然の人ではなかったろうか。

忠度はその血統と年代から清盛直系の子たちのよき補佐役であることを初めから期待されていた。東国で挙兵した源頼朝を鎮圧しようと三万余騎の平家の軍勢が向かった際、大将軍はなき重盛の長男で弱冠二十三歳の維盛、そして、副将軍が忠度であった。このとき忠度は三十六歳である。維盛は重盛が前年、急死したあと清盛の後継者とみられていた。この頼朝討伐から二年後、今度は北陸道を攻め上る木曾義仲軍を迎え撃とうと十万余騎の大軍が向かったときも忠度は副将軍であった。

しかしながら忠度という人が一人の武人として、まして大軍勢の指揮官としてすぐれていたかとなると大いに疑問がある。頼朝追討の際は出で立ちこそ「紺地の錦の直垂に、黒糸縅の鎧着て、黒き馬の太うたくましきに、沃懸地の鞍置いて乗り給へり」という目覚しいものであったが、日ごろ、通い慣れた女とひそかに歌など詠み交わしてしばしの別れを惜しんだりしている。その別れの惜しみ方にこの人らしい、ありていにいえば武人としての弱みが浮かび上がっているように思う。

別れ路を何か嘆かん越えて行く関もむかしの跡と思へば　　平忠度

「関もむかしの跡」とは二百五十年も昔、平将門を討つために関東へ下った先祖の平貞盛に自分をなぞらえているのである。今生の別れとなるやもしれぬ女の身の上を気づかうというのでもなく、いにしえの貞盛公さながら戦へ向かう自分自身の悲壮な姿に陶然としているという歌だろう。その晴れがましさを思えば、あなたとの別れは嘆くに及ばない、むしろ喜ぶべきことだというのが「別れ路を何か嘆かん」である。こうして女を振り切って戦場へ赴こうとしている自分自身に感動している。

この優に優しき人に戦場での活躍など期待する方が愚かというものである。都をたっておよそ一か月後、富士川をはさんで源氏の軍勢と向かい合ったまま迎えたある日の明け方、いっせいに飛びたつ水鳥の羽音に驚いて命からがら都へ逃げ帰った敗残兵たちの中に忠度の姿もあった。

義仲追討の際には大将軍維盛の本隊は北陸道を先に進んでいるというのに、副将軍忠度たちは琵琶湖の北に留まってなかなか動こうとしない。副将軍の一人は湖に舟を出して竹生島に詣で、弁財天のために琵琶を奏でたりしている。この戦でも平家軍は数の上では圧倒していたにもかかわらず、義仲軍に散々に蹴散らされてまたもや都へ逃げ帰る。

忠度の本領は野蛮な戦ではなく初めから優しき歌にあった。父の忠盛はすぐれた武将であり、すぐれた武人らしくへたな歌を残しているが、その父に芽生えた歌の素質が息子の身を借りて花開いたということだろう。文武両道などというが、この二つがそうたやすく手に入るわけはなく、武人はまず武に励むべきである。まちがっても歌などに手を出さないことであり、歌を詠むならへたがよい。へたなところに武将らしい味わいがでる。なまじ忠度のように歌の上手が武人であったりすれば迷惑をこうむる人がでてくる。

受験番号						
氏名						

二〇一八年度 教育学部 帰国生入試 問題用紙

国語国文学科

「小論文」

さて、北陸道で平家軍を打ち負かし、地鳴りのように都へと近づく義仲の軍勢におびえて、平家の人々はいっせいに都を落ちてゆく。そのとき、忠度はいったん都を離れながら供まわりの者をひき連れて敵軍の迫る洛中へ引き返し、藤原俊成の屋敷の門を叩いた。大歌人俊成はこのとき七十歳近い老人である。忠度はかつてこの人について歌を学んだ。

俊成との対面を許された忠度は鎧の下から自選の歌百首をしたためておいた巻物を取り出すと、「こののち世静まって、撰集の御沙汰候はば、これに候ふ巻物の中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩を蒙って、草の陰にても嬉しと存じ候はば、遠き御守とこそなり参らせ候はんずれ」と①心のうちを明かしつつ巻物を俊成に奉るとふたたび都を落ちていった。忠度はその後、二度と都に帰ることはなかった。

これまで詠んできた歌が自分の死によってこの世界から忘れ去られ、消え失せてしまうとすれば死んでも死にきれない。その中のたとえ一首であっても死後に残したい。それがかなうならこの世に何の未練も残さずに死ねる。そこで忠度は自分と供まわりの者たちの身を危険にさらしてまでも都へ引き返して、師であり歌壇の大立者である俊成にすがった。

『平家物語』の作者は命を顧みず都へ引き返した忠度の歌への執心をあわれと観じ、美談として物語の中に書き入れた。この歌への執心が後々まで尾を引くことになる。

実は②このときすでに後白河法皇から俊成に対して和歌集編纂を命じる院宣がくだっていた。俊成は新しい勅撰和歌集に入れる歌を選んでいる最中に忠度から百首の歌を託されたことになる。

さてどうしたものかと俊成は思案をめぐらせる。忠度から預かった巻物にはさすがにいい歌がいくらもあるが、今や朝敵となり果てた平家の公達の歌を勅撰集に入れるのは何ともはばかられる。かといってこのまま闇に葬り去るのは惜しい。一首なりとも拾うとしても、やはり名を出すわけにはゆかない。「巻物の中に、さりぬべき歌幾らもありけれども、その身勅勘の人なれば、名字をば顕はされず」というわけで、俊成は巻物の歌の中から「さざ波や志賀の都は」という③山桜の歌を拾い、読人知らず、すなわち作者不明の歌として入集する。

問一、傍線部①「心のうち」とは、どのようなことか、説明しなさい。

問二、傍線部②の歌集名を漢字で答えなさい。

問三、傍線部③のような俊成の判断について、あなた の考えを論じなさい。

【注意】解答はすべて解答用紙に記入して下さい。解答は、「問一」「問二」「問三」と問題番号を記入してから、続けて書いて下さい。解答用紙は、裏面も使用できます。

二〇一八年度 教育学部 帰国生入試 解答用紙

国語国文学科

「小 論 文」

受験番号					
氏名					

採点欄

No. 1

裏面使用可

ここから下には記入しないこと ↓

ここから上には記入しないこと